

# 読書感想文コンクール入賞作品

## 最優秀賞

「夜と霧」 ヴィクトール・E・フランクル 著

### 夜と霧の先にあるもの — 『夜と霧』 を読んで —

機械工学科1年 北橋 良隆

『夜と霧』この名作を読もうと思った理由は2つあります。1つ目は、2021年に中華人民共和国の新疆ウイグル自治区におけるジェノサイドのニュースに衝撃を受け、80年程前のナチス・ドイツによるユダヤ人などに対するホロコーストについて知っておくべきだと強く感じたからです。2つ目は、担任の先生から『人類の必読書』として勧めて下さったからです。

この本は、心理学者であるヴィクトール・E・フランクル氏がナチス・ドイツの強制収容所に移送させられ、そこで自らの身や周囲の人びとに起こった出来事をありのままに、そして心理学者としてそれらが精神にどのような影響を与えたのかを推察した結果を綴った作品であり、同時に人間の偉大と悲惨を描いた作品でもあります。

この本を読んで特に印象に残ったのは、

生きる意味についての問いを180度転換することだ。わたしたちが生きることからなにを期待するかではなく、むしろひたすら、生きることがわたしたちからなにを期待しているかが問題なのだ、ということを知り、絶望している人間に伝えねばならない。

という部分です。この部分から気付かされることが多くありました。この本には『収容所にいたことのない人には、わかってもらうように話すなど、とうてい無理だからだ』と書かれており、実際に経験していない人がいくら想像を巡らせても経験した人のようにはなれないため、経験した人、そうでない人との間に認識のギャップが生じてしまうと思います。しかし、『生きる意味についての問いを180度転換する』ことは、経験した人、そうでない人、どちらも行うことができるものだと思います。よって、そのことが経験した人とそうでない人とを結ぶ橋なのではないかと思いました。

『生きることがわたしたちからなにを期待しているかが問題なのだ』とありますが、私は生きる上で対価を求めるのではなく、生きているということに感謝・感動し、自らが自らの命に試練や褒美を与えるというのが『生きる』ことではないのだろうかと考えました。生きていなければ喜びや悲しみなど、何も感じ取ることはできません。命がいかに尊いものなのかを私達は今一度深く知らなければならぬと思いました。

私は本のタイトルである『夜と霧』について考えました。80年前の凄惨たる大戦を『夜』とするならば、夜明け、大戦の終結の後に待っていたものは、朝鮮戦争、東西冷戦、各地で起こる紛争、そしてウクライナ戦争…。先行きの見えない混沌とした世界、『霧』だった。そしてこの先を『夜』にするか、『霧』のままにするか、霧を晴らして平和な世界にするかを決定するのは、ガス室を発明したのと同時に祈りの言葉を口にする『人間』である。という意味がタイトルに秘められているのではないかと考えました。

今回この本を読んで、私達人間が残酷であり同時に善良な存在であるということを知りました。どの方向に転じるか分からない現在の世界を生きるには、絶望するのではなく、希望を持つということが重要であると感じました。

「鼻」 芥川 龍之介 著

## 他人の幸せと自分の幸せ

物質化学工学科3年 原田 綾音

痛い所を衝かれた。この本を読んで、私はそう思った。

もちろん、だれでも他人の不幸に同情しない者はない。ところがその人がその不幸を、どうにかして切り抜ける事ができると、今度はこっちでなんとなく物足りないような心もちがする。少し誇張して言えば、もう一度その人を、同じ不幸におとし入れてみたいような気にさえなる。

この言葉にドキッとさせられたのは、多分私だけではないだろう。いわゆる、「他人の不幸は蜜の味」とかいう類の感情である。心当たりはあるものの、人として汚い感情であるからと自覚して人前には出さなかった感情を、ストレートに暴かれたような気がして、私は暫く本を読む手を止めてしまった。

普通に考えて、ある人が不幸になったからといって自分が幸せになったわけではない。逆に、ある人が幸せになったからといって、自分が不幸になったわけでもないのだ。それでも何だか、他人の不幸を心のどこかで望み、他人の幸せを素直に喜ぶことができない。こうってしまうのは、人が比べたがりだからだろうと私は思う。人は自分と他人とを比較して、上には上がいることを知って絶望し、下には下がいることを知って安心するのである。だから、自分より幸福度の高い人間を見ると、自分と比較してしまって、自分が不幸であるかのように思えてくる。終いには、その人に対して攻撃的な感情さえ芽生えてきたりもする。逆に、自分より幸福度の低い人間を見ると、自分が幸せであるかのように思えて、現状に満足し始めたりするのである。この事を著者は、「傍観者の利己主義」と表現したが、まさにそのとおりであると思う。

でも、他人の幸せを心から祝福できる瞬間も、少なからずあるのではないかと思う。自分が最高に幸せで満ち足りているときである。このときだけは、他人のどんな幸せも素直に受け入れられる。それは、他人がどんなに幸せであろうと、自らの幸せには敵わないと思えるからであろう。いや、最早他人と比較するのさえ馬鹿らしいという心持ちであるかもしれない。つまり、人間が、人として綺麗な心を持てるようになるためには、最高級に幸せにならないといけないのである。

私は別に、この本を読んで、他人の幸せを心から祝福できる人になろうと思った、なんて書くつもりはない。そういう心の綺麗な人になれるだけの幸せを手にするのは、私にはまだ程遠いことのような気がする。私はただ、この本を読んで、人前に出すことのなかった自らの心の汚い部分を再確認させられた。そして、他人がどんなに幸せであっても、憎むよりも先に「私も幸せだ」と胸を張って言える人間になりたいと思った。「私も幸せだ」とは、最高級の幸せではなく、日常の中にある、小さな幸せを指している。どんなジャンルの幸せでもいい。今日食べたご飯が美味しかった、だとか、いつもより空が綺麗な気がする、だとか、友達とくだらない話で大笑いした、だとか。そういう小さな幸せ一つ一つに目を向けて、たとえ最高に幸せではなくとも、それなりに自分は幸せだと感じられる人になりたい。他人と比べて落ち込むより、その方がよっぽど良いじゃないか。

## 優秀賞

「フラダン」 古内 一絵 著

### 本当の「気遣い」に必要なもの

電子制御工学科 2年 齋藤 琢磨

「あのなあ、人間、お互いになんか考えてつか分かんねんだから、言葉ってもんがあんだよ。せっかく、おめーは意見があんのに、それをしっかり伝えられなくてどうすんだ！」

作品後半の緊迫した場面で放たれるこの台詞。読んだ瞬間、私は主人公と完全に同じ反応をしていた。ハッとした。

言葉は、ただ相手に連絡をしたり、うわべだけのコミュニケーションに使われるものではないはずだ。もっと言葉をうまく使えたら会話をもっと楽しくできるし、もっとお互いを信頼できる関係が築けるだろうなあと思いつつも、私は言葉の「本当の使い方」をよく知らなかった。しかし、この作品を読んだことで私は言葉について二つ学んだ。

一つ目は、言葉の力を信じること。福島が舞台となっているこの作品では、登場人物がそれぞれ震災後の辛い思いや悲しみを抱えており、相手の事情に気軽に踏み込むことができない。だが、抱えている思いを言葉にして共有することで得られるものがある。友情、勇気、立ち直る力、夢。素直に言葉にすることとは難しいが、その力を信じ、もう一歩だけ相手に歩み寄ってみることこそが「気遣い」に繋がり、一人で抱え込んでいては見えないものも見えるようになるだろう。

二つ目は、絶望的な状況の中でも声を出してみる。作中には暗く重い空気が流れる場面が数回ある。その際に、決まって誰かが話を始める。話し合いをするとき、周りが黙っていると私はその空気に流されてしまう。自分の意見を自分で押し殺したこともある。そんなとき、この作品の人物のように何か声を発してみるということが必要なのだと思う。冒頭に挙げた台詞には、震災からの形式的な「復興」を超えようとする心のしなやかさや、人との関わりの中で何かを見つけようとするエネルギーが含まれているように感じた。

この作品を読んで学んだことは、言葉について以外にもう一つ。それは、「無知」ということの恐ろしさである。主人公は最初は全くフラダンスに興味も知識も無かったが、男性が踊る古典フラの存在を知り、情熱ある仲間と踊る中でその楽しさに魅了されていく。この「知る」という行為が大切なのだと思う。私は、発電所の事故を起こした側の家族の気持ちや、震災で被害を受けた人と受けなかった人の間での諍いについてなど考えたことがなかった。自分がどれほど無知であり、それがどれほど恐ろしく愚かなことであつたか思い知った。興味が無いから、踏み込みにくい話題だからといって知ろうとせず、進もうとしないのは最も無駄であり、失礼なのだ。知ってみると新しい見方が可能になる。新しい見方ができるようになれば、新しい解決策も生まれるかもしれない。知ることは楽しさであり、言葉の有効な活用法でもある。

作品終盤に酔芙蓉という花が出てくる。朝は純白、夕方には薄紅色になる花だ。この作品は、気を遣って何も話さないまま相手を理解しようとしていた私に、言葉を交わして知ることの大切さという新しい色を加えてくれた。「静」の気遣いから「動」の気遣いへと考えを変えてくれたこの作品のおかげで私も少し鮮やかになれた。この作品と、言葉を交わして私に彩りを与えてくれる両親や友人に始まる全ての人に感謝するとともに、私自身も自分の言葉を信じて、もう一段階踏み出し、知ろうと努力していきたい。

「ライオンのおやつ」 小川 糸 著

## 緩やかな滑り台

電子制御工学科2年 山口 陽香梨

人生がもうすぐ終わりを迎えることを知ったら、人はどうするのだろうか。なるべく寿命を延ばす？やり残したことを完遂して満足する？この物語『ライオンのおやつ』の主人公である海野雫が選んだのは、残りの人生をホスピスで過ごす道だった。

雫が末期の癌を患っていること、余命があと半年もないことを宣告されたのは、まだ三十三歳。それを知った雫は「海が見える場所でじっくり眠りたい」という願いとともに瀬戸内の温暖な島に建つホスピス「ライオンの家」で余生を過ごすことに決めた。病院とはまるで雰囲気の違いが暖かくて優しい空間で、様々な境遇を持つ人々と交わり、幸福な時間を噛み締めながら本当にしたかったことを考える。当たり前のように私たちの前に存在する明日が来ない、というのはどういう感覚なのだろう。その感覚を抱えてどのようにして余生を過ごせば良いのだろうか。それらに興味を持った私は、好奇心と不安感をないまぜにした不思議を抱きながら本のページを捲った。

読了後の感想として第一に思ったのは「ホスピスで過ごした日々は、第二の人生の早送りのようだ」であった。出会い、死別、恋。人生における様々な出来事とその半年間に凝縮されているように感じた。また、読み始めたころは「人生のやり直し」だと思っていたが、読み進めるにつれ「第二の人生」という表現の方がしっくり来るような気がした。この物語では、雫が過去の思い出を振り返るシーンが頻繁に存在する。男手一つで自分を育ててくれた父との思い出、喧嘩別れをしたのが最期だということ、余命宣告をされた日の夜にぬいぐるみに当たり散らしたことなど。これら全ての思い出を上書きするのではなく、今までの思い出を抱えながらライオンの家で新鮮なことでいっぱいな人生を過ごす。第一の人生を歩んできた自分をねぎらいながら残りを新たな気持ちで生きるというのは、まさしく「第二の人生」ではないだろうか。私はここから自己愛を感じた。今まで生きてきた自分を一番憶えていて、頑張ったねと褒めてくれるのは、その思い出を振り返る未来の自分なのかもしれない。ならば私は未来の自分が振り返り甲斐のある濃厚な人生を歩みたいと、そう思った。

特に印象的だったのは、最期が近づいてきた雫のもとに死者が一人ずつ訪れるシーンだ。雫より先に旅立ったアワトリス氏、幼い頃に亡くした母親、心の支えになっていた犬の、亡くなった飼い主などが雫のもとに現れ、話を交わしていつの間にか去っていく。その場面が何の脈絡もなく切り替わる為「ここは雫の知っている生死の狭間のような場所かな」と容易に想像できた。語り手である雫自身も曖昧な意識のまま物語が進んでいく。クライマックスを示唆するような書き方が怖くもあったが、最後の方ではそれにも慣れてきた。恐らく、雫もそういう気分だったのだろう。

この物語では「死」が前提としてその感覚がとても如実に語られている。しかし、ライオンの家の居心地の良さ、もしくは雫自身の感謝の気持ちが物語の多くで述べられているからか、終始穏やかな気持ちで読むことができた。明日が来ない。それは絶望と同義かもしれない。だからこそ、終の住処で自分のやりたようにのびのびと生きる雫を見て、人生の駒を進めることへの希望を貰えた気がする。原稿用紙二枚では語れないほどの感銘を受け、その全てを伝えきれそうにないのが口惜しい。だから是非この本を読んで雫に関わる人々の「第二の人生」を覗いてみてほしい。